

智頭病院だより

65歳以上の5人に1人、85歳以上の3人に1人

認知症を正しく知るために

内科医師 岡田 捷豊

認知症は、脳の病気や加齢などによって、記憶力や判断力が低下し、日常生活に支障をきたす状態です。



厚生労働省によると、2025年時点で全国で約700万人が認知症とされており、軽度認知障害(MCI)・日常生活には大きな支障がない状態)の、約600万人を加えると、国民の10人に1人が認知機能に変化を抱えているとされています。

認知症で最も多いのはアルツハイマー型認知症で、全体の約60〜70%を占めます。そのほか、脳梗塞や脳出血などによって起こる血管性認知症や、「実際にはない人や動物が見える」といった幻視や、動作がゆっくりになるなどの症状がある、レビー小体型認知症などがあります。

認知症では、「同じことを何度も尋ねる」「物の置き場所、約束、予定を忘れる」といった症状がみられます。家事や仕事がうまくできなくなったり、不安や戸惑いから怒りっぽくなったりすることもあります。

一方で、認知症は「できること」も多く残されています。本人の気持ちを尊重し、温かく見守ることが安心につながります。

また包括支援センターや認知症相談窓口などもあります。もの忘れが気になる場合や家族の対応に悩んだときは、一人で抱え込まず、早めに相談しましょう。

「年齢のせいだから仕方がない」と思いがち、ものの忘れの中には、認知症が隠れているかもしれません。しかし、最近では新しい治療薬もでき、早期に発見し、対応することで進行を

遅らせることができます。「年齢のせい」と決めつけず、智頭病院の内科医へ相談ください。認知症になっても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けることは可能です。そのためにも、一人ひとりが認知症への理解を深め、支え合える地域づくりを進めていくことが大切です。

10月 ほのぼのフェスタ 今年も開催します!

家族や友達と誘い合わせてお越し下さい♪

10月24日(土) 午前10時～
智頭町保健・医療・福祉総合センター
「ほのぼの」

問合せ先

国民健康保険智頭病院

☎75-3211